
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 99

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 1961. 複雑性科学と作曲
- 1962. カオスの縁・複雑適応系と作曲
- 1963. 時間と発達: 文学と音楽
- 1964. 再開
- 1965. MOOCと作曲に関する研究の実現へ向けて
- 1966. 福永武彦氏の文学と欧州での残りの生活
- 1967. 松が教えてくれたこと
- 1968. 作曲という創造的問題解決
- 1969. 曲の階層的な時間スケール
- 1970. 生活環境の変化について思うこと
- 1971. これからの七ヶ月
- 1972. 実家滞在最終日の夢
- 1973. 諦念とトンネル
- 1974. 日本各地を巡る旅
- 1975. 予期せぬ最後の瞬間
- 1976. 出発の朝に
- 1977. 成田空港のラウンジで
- 1978. 出発の決意
- 1979. ロシア上空での決意の確認
- 1980. 充実感という一筆を

早朝、複雑性科学に関する哲学書を読み進めていると、大変興味深い記述に遭遇した。それは、物質において、その階層ごとに固有の時間スケールが存在しているというものだった。これは物質のみならず、私たちの精神にも当てはまるのではないかと思った。精神的な発達を考えてみた場合、どうも成熟を遂げた精神の時間感覚は、未成熟の精神のそれと異なるようなのだ。ここから私は、発達の階層ごとにその時間感覚は変わりうるものなのではないか、という仮説を立てるに至った。

発達を遂げるに応じて私たちの認識世界が変容していくことを考えると、この仮説はそれほど驚くに値しないかもしれない。ただし、私が注目していたのは、物質における時間スケールが、構成要素の数や種類、そしてそれらの相互作用の性質によって決定付けられるということだった。

精神の発達において、時間感覚が異なるであろうということは前々から考えていたことではあったが、その要因として、精神を構成する要素の数や種類、そしてそれらの相互作用を考慮する観点とは、これまで強く意識したことはなかった。発達段階ごとに異なる時間感覚を考察していく上で、それらの観点を持っておくことは重要になるだろう。

もう一つこの哲学書を読みながら改めて考えていたのは、音楽の自己組織化現象である。とりわけ、作曲をしている最中に、音が音を自発的に生み出す不思議な現象に遭遇することがたびたびあり、その現象を大変興味深いと思っていた。例えば、メロディーの一節が生まれたら、そのメロディーが自発的に次のメロディーに展開していくのである。メロディーがメロディーを自発的に創出していくというこの運動は、実に神秘的である。しかし、それを神秘的だと言で片付けるのではなく、その背後には、メロディーが持つ自己組織化という特性があったのだということに気づく。

もちろん、これはメロディーに限らず、リズムやハーモニー、そして転調においても見られる現象だろう。すなわち、音楽には自己組織化運動をする内在的な力が存在しているのだ。そのように考えてみると、もはや音楽とは生命に他ならないように思えてくる。

一つの音が全く別の音を生み出す現象を日々体験していると、音楽と複雑性科学に関する探究をより一層深く行いたいという思いが沸々と湧いてくる。もう一つ、複雑性科学における重要な概念である「相転移」と音楽との関係について考えていた。相転移とは、不安定な状態にあるシステムが、

臨界点に達し、突然に質的变化を遂げることを指す。作曲をしていても、これと同様の現象に出くわすことがある。おそらく作曲家は、曲のストーリーを考慮して転調を行うのだと思うが、その背後にはストーリー性のみならず、その曲が進行していくに応じて、ある臨界点に達した時に転調を行うこともあるのではないかと思った。

曲中における臨界点の定義は様々に考えられるが、「この辺りで転調をした方がいい」というような感覚的な把握として、作曲家は臨界点を掴まえていく。臨界点を超え、転調を行うと、曲の雰囲気に変化するの、そこに相転移という突発的な質的变化があるからだろう。

色々と調べてみると、物質においては、それぞれ決まった臨界点があるらしい。ここから発想を広げると、曲の性質に応じて決まった臨界点があるのではないかという仮説が立つ。仮に曲の性質に着目することが難しければ、まずは過去の偉大な作曲家が残した楽曲を対象にして、作曲家ごとの臨界点の範囲を特定する研究を行うのは面白そうだ。

つまるところ相転移とは、不安定な状態から安定的な状態へと向かう力と不安定な状態に留まろうとする力のせめぎ合いの中で起こる。要するに、相転移とは秩序を求める力と無秩序を求める力との拮抗によって引き起こされるものなのだ。そのようなことを考えていると、作曲とは、秩序を希求する衝動と無秩序を希求する衝動との調和のもとになされる行為なのかもしれないという思いが湧き上がる。山口県光市:2018/1/2(火)08:47

No.599: Possible Effect of Population Density on Mind and Body

The weather in Tokyo is not so good today.

From the window of a train, I can see how dense the population in this country is. I think the population density has an immense impact on Japanese mind and body. It shapes the contour of Japanese mentality and their somatic senses.

I completed the draft of a PPT document for my poster presentation the week after the next. Since I planned to finish it on an airplane tomorrow, I will have enough time to focus on

composing music and reading books tonight and tomorrow. The fact makes my heart vibrate with joy. Narita, 16:18, Friday, 1/5/2018

1962. カオスの縁・複雑適応系と作曲

朝食後、再び複雑性科学と音楽の関係性に考えが及ぶ。特に、「カオスの縁」と曲の関係について少しばかり考えていた。

カオスの縁とは、秩序と混沌が絶妙な調和をなしている領域のことを指す。作曲に際して、曲が見事に展開されていくのはもしかすると、カオスの縁に曲がある状態なのではないかと思う。曲の流れが静的すぎる場合には、曲は固着化してしまい、変化が起こりにくくなる。一方、曲の流れが動的すぎる場合には、曲が崩壊してしまう危険性をはらんでいる。

ふとこれまでの作曲理論の解説書を思い出してみると、「作曲において重要なのは、均一性と多様性という相矛盾する特性である」という記述があったことを思い出した。まさにこの記述は、作曲におけるカオスの縁のことを指しているのではないだろうか。

これまで複雑性科学をそれとして単体で学ぶか、発達科学との関連性で探究を進めてきたが、今突如として音楽との関係性が見え始めている。複数の学術領域を越境し、それらが相互作用をし始めている姿を見ることができる。

これから作曲実践を進めていくにあたって、複雑性科学の知見は大いに役に立つだろう。ここから私は、自分の作曲実践に仏教思想を取り入れたいとも考えている。それら多様な領域が相互作用をなし、実践上の相転移を起こすことを大いに期待している。

上記の考えを書き留めた後、再び午前中に取り掛かっていた本を読み始め、そこからさらに、「複雑適応系」と作曲について考えていた。複雑適応系とは、複雑な振る舞いを見せながら環境に適応していくシステムのことを指す。

作曲において複雑適応系とはいかなるものであるかについて考えを進めていた。例えば、ハーモニーはメロディーを包摂しながら全体としての調和を生み出していく。ハーモニーというのは、メロディーを環境として、それに適応して生み出されるとも言えるだろうし、既存の和声に応じて新たな

和声を生み出していくことから、和声自身を環境として、それに適応しながらハーモニーが生み出されていく、とも言えるだろう。

メロディーに関しては、仮にメロディーから曲を生み出していく場合には、一見すると作曲空間の中では環境に該当するものを見出すのは難しい。しかし、ハーモニーと同様に、一つの音符を起点にして生み出されるメロディーは、既存のメロディーを環境として適応していくことによって、メロディーを発展させていくと考えることもできそうだ。さらには、作曲空間をより開かれたものとして捉えると、まさに作曲者が置かれている物理的環境や、その時の心身の状態なども環境に該当する。メロディーは、それらの環境に適応する形で自らを生成していく。

複雑性科学の観点をを用いて作曲を捉えていくと、次々に新たな発見と気づきがもたらされる。今後
も折を見て、複雑性科学の観点を活用しながら作曲実践を捉えていきたいと思う。山口県光市：

2018/1/2(火)09:34

1963. 時間と発達: 文学と音楽

時間はどこにあるのか？という問いを考える際に、今朝から読んでいる書籍の中に興味深い記述を見つけた。それは、「時間とは運動や変化のうちにある」という記述である。時間とは、私たちの外側にあるものではなく、私自身の内的な運動や内的な変化の中に宿るものなのかもしれない。

自分がある変化を経験したのち、その変化の前後を考えてみた際に初めて時間というものが立ち現れるのである。時間というのは終始一貫して、外的現象ではなく内的現象なのだ、という思いが強くなる。確かに、外的な時間というものを措定することは可能であり、事実私たちの多くは、そうした外的な時間に従って日常を過ごしている。しかし、そうした時間にばかり囚われていてはならない。

なぜなら、外的な時間というものは、時間の持つ一つの側面に過ぎず、そしてそれは時間の本質的な側面ではないからである。真に時間を感じるというのは、自己の内側の運動や変化を真に感じるということである。仮に自己の内側に息づく運動や変化を感じ取ることができないのであれば、それは外側の時間感覚に強く縛られて生きていることの証かもしれない。

私は、福永武彦氏の全集の一冊を手に取り、そのページを何気なくめくっていた。そこで展開されている物語の世界に入っていないにもかかわらず、何か自分の内側で動くものを感じた。私の内側の何かが、福永氏の作品と共鳴しているのが手に取るようにわかった。

福永氏の文章の美しさ。そこには福永氏の思想が実存的な香りと共に立ち込めており、華美でも質素でもない不思議な色調がある。

これまで私は文学とは無縁であり、小説などほとんど読んだことはないのだが、福永氏の小説はじっくりと読み進めたいという強い思いがある。これはもしかすると、私が音楽の探求に乗り出したことと関係しているかもしれない。音楽を通じた美的探求を進めれば進めるほど、文学と音楽の接点のようなものが見え始めている。その接点を乱暴に述べれば、美に尽きるのだが、文学を通じて音楽体験を、音楽を通じて文学体験を深めたいという思いが今の私にはある。

一時帰国する前の当初は、購入した福永氏の全集のうち、数冊を欧州に持って帰ろうと思ったが、今は購入した全ての全集を持って帰る必要があると強く思う。それらは、今後欧米での生活を続けていくに際して不可欠のものになる。そんな直感が自分の中で起こった。

文学と音楽。これら二つに耽りながら、自己の生をより深めることができたならなんと幸福だろうか。文学と音楽に無縁だった私は、今ではそのようなことを思うようになった。山口県光市:2018/1/2(火)

10:31

No.600: Active Nirvana

I determined to be a person embodying “active nirvana.” Every action, every thought, every emotion, and every breath should be done to deeply engage in this world.

While waiting for a flight for Helsinki, I realized again that this reality was a tapestry constructed by the collaboration with everybody. Literally, this reality is made by everybody and made for everybody. One node in the tapestry is the whole, whereas the latter is the former.

Like someone else, I’m a tiny but crucial agent to foster the development of the nexus for further truth, goodness, and beauty. In the sky above Russia, 15:20, Saturday, 1/6/2018

今日もまた、神々しく輝く朝日が山際から出始めた。連日このような朝日を拝むことができるということが、どれほど自分の心を穏やかにするだろうか。この時間帯の太陽は本当に美しい

昨日から、再び自分の曲を作ることに力を入れ始めた。この二、三週間はあえて曲を作ることをせず、専門書を用いて作曲理論を学ぶことに専心していた。

昨日に研究計画書の最終ドラフトを完成させたのち、二つの短い曲を作った。一つの曲は、現在滞在している実家から眺めることのできる瀬戸内海をモチーフにしたものである。

実家に滞在中は基本的に毎日、昼食を摂り終えてしばらくしてから砂浜を散歩している。散歩の中で得られたアイデアや感覚をもとに一曲作った。メロディーに関しては随分と前に作ったものを活用したが、ベース部分をどのように工夫するかをしばらく考えていた。ちょうど先日読んだ書籍の中に、海の波の様子を表現するのに活用できそうな演奏記号を見つけたため、それを活用してみた。それはこれまで一度も活用したことのなかった演奏記号だが、活用してみると色々と新たな発見をするものである。毎回新しい曲を作る際に、必ず新しいことを試したいと思う。

新たな試みが新たな発見を生み、新たな発見が作曲技術をさらに高めていく。とにかく小さな曲を無数に作っていく。膨大な数の局所的な作曲実践が、やがて大局的な発達現象を引き起こすかどうかを検証してみたいと思う。大きな曲を作る必要など全くなく、短い曲を毎日数多く生み出していくという実験的試みを継続することによって、それが大局的な発達につながっていくかを検証していくのである。

だが、単純に短い曲を作っていくのではない。一つ一つの曲は短くて構わないのだが、そこに自分なりの意味を込める。あるいは、常に何らかの作曲理論を意図的に適用したものとする。常に何か新しいことを試す不完全な曲が理想だ。完全な曲など今の私には作りようがないし、そもそも曲というものに完全性があるのかも疑わしい。日々の体験を小さな曲の形にし、それを膨大に積み重ねていき、巨大な大伽藍を徐々に構築していく。人生の最後の日に、積み上げられた大伽藍をそこで初めて仰ぎ見る。それまでは、ただひたすらに曲を創出していくことに専心する。

昨日作った曲を両親に聞いてもらったところ、父からの的確なフィードバックが返ってきた。父は特別な音楽教育を受けているわけではないのだが、その曲の調が突然変わっていることを指摘した。どうやらそこに違和感があったようだ。私はあえて、海が突然表情を変えるところをそのように表現したつもりだったが、転調については今後真剣に学んでいく必要がある。

一時帰国の際に、ちょうどドイツの作曲家マックス・レーガーの“Modulation (2007)”という書籍を持って帰ってきており、それをこれから読み込んでいく必要があるだろう。やはり一読をただけでは、転調について何も分かっておらず、実際に曲を作りながら転調の技術を試していく必要がありそうだ。山口県光市:2018/1/3(水)07:50

No.601: Goodbye for a While

I came to realize that I could not come back to my home country for a while because of my existential and spiritual reasons. Is that a tragedy? No, it isn't. That was a destiny in my life. It would have come sooner or later even if it didn't happen now.

How can I come back to Japan next time? It would be actualized by my continuous work; that's all, and it cannot be done by anything else. Each small work in my daily life is a vital step of the path to beloved Japan. I have to say good by to my mother country for a while until I unite with it in the deep dimension of my psyche. In the sky above Russia, 15:29, Saturday, 1/6/2018

1965. MOOCと作曲に関する研究の実現へ向けて

今朝方メールを確認すると、来年に所属予定の大学院の教授から返信メールがあった。嬉しいことに、協働研究に対して非常に前向きに考えてくれているようであった。その教授は音楽科に在籍している作曲家かつ作曲理論の専門家であり、作曲技術の発達と作曲理論の理解力に関する発達を研究する上で、その教授の支援は不可欠だと考えていた。

仮に私がその大学に所属することになったら、来年のスケジュールを調整してくださる旨の連絡を受け、まだその大学に受け入れられるかどうかは不明なのだが、作曲に関する新しい研究を進められるかもしれないという期待に心が躍る。

来月あたりに客員研究員の出願を済ませる予定だが、その出願書類に記載する研究は依然としてMOOCに関するものにする予定である。やはり今行っている研究の延長線上にある研究をその大学でも行い、非線形ダイナミクスやダイナミックシステムアプローチに関する理解をさらに深いものにしていきたい。ただし、MOOCの研究を続ける場合にも、研究対象として取り上げるコースは音楽に関するものとしたい。

昨日に作曲した曲が突然の転調によって違和感を生んでいたことを思い出し、研究テーマも転調をするにしても、徐々に流れるように調を変えていきたいと思う。つまり、研究テーマを全くの異分野に転換するのではなく、必ず共通の音を持たせながら、徐々にテーマを変えていく。とはいえ、作曲技術の発達と作曲理論の理解力に関する研究をしたいという思いは募る一方であるから、客員研究員の出願時にはMOOCの研究を進めていくことを強調しながらも、実際に大学に受け入れられたら、その一年間で双方の研究に従事したいと思う。

客員研究員としての一年間は研究に集中できるであろうから、MOOCの研究と作曲に関する研究の双方を行うことが可能だ。幸運にも、MOOCに関してもすでに一人の教授から返信を受け、作曲に関しても一人の教授から連絡を受けた。それら双方の研究で活用する予定の時系列データ分析に関しても、それを専門とする一人の教授から好意的な返信を受けた。それら三人の教授の力を借りることができたら、本当に二つの研究テーマを同時に推し進めることができるかもしれない。

新たな年を迎え、今年一年が非常に意味のある年であり、大きな変貌を自己にもたらすであろうということが見えてきた。山口県光市:2018/1/3(水)08:05

No.602: Restart

As well as the gradual process of modulation in music, I need to adjust my mind from the mental world constructed in Japanese to that in English. Writing an English journal could be a beneficial method for me.

From tonight, I'll resume my life saturated with English symbols and their auxiliary emotions and senses. I hope I'm ready for the restart in my life. In the sky above Russia, 15:35, Saturday, 1/6/2018

日本での滞在期間がもう残すところわずかとなった。二週間強の期間を日本で過ごしたが、本当にあっという間に時間が過ぎていったように感じる。時の流れは非常に早く感じられたが、充実感に溢れる日々だったように思う。昨日ふと、欧州に戻ってからは、平日は学術研究に専心し、週末は福永武彦氏の文学作品を読み、作曲実践に多くの時間を充てるようにしたいと思った。

昨日の日記に書き留めていたように、福永氏の小説は私を打つものがあり、精神をより豊かにしてくれるという確信がある。日々の探究活動に邁進するあまり、ついつい週末も全く同じような探究を続けてしまいがちであるが、週末のうち少なくとも片方は、福永氏の文学作品を読むような心のゆとりを設けたい。福永氏の作品から滲み出す思想とその美しい文体から、私は多くのことを学ぶであろう。そうした読書体験から得られたものを、作曲実践に還元していきたい。

作曲も文学と同じであり、技術的なことは当然重要であるが、それ以上に重要なのは、作り手の思想だろう。思想を耕す上でも、文学体験を含め、豊かな体験を日々積んでいくことができたらと思う。

昨日の午後に、実家に置いてあった音楽関係の書籍に目をしてしていると、今年の四月あたりにワルシャワとブダペストに足を運ぼうと思った。ワルシャワにあるショパン博物館は、以前から足を運びたいと思っていた場所である。それに加えて、ブダペストにあるリスト博物館にも行ってみたいという思いが突如として湧き上がった。そうした思いに捕まった私は、頭の中で即座に旅の計画を立てていた。

フローニンゲンからワルシャワに行き、ワルシャワからブダペストに行く旅。各都市にはそれぞれ数日間滞在し、今回の旅はできればゆったりと列車で移動したい。そのような夢に囚われていた。この旅の実現は四月を予定しているが、よくよく考えると、四月はあっという間に訪れそうな予感がある。欧州に戻り、再び探究活動を日々行っていくことを続けていれば、ここからの三ヶ月は瞬く間に過ぎていくだろう。その頃になれば、秋から所属する予定の大学院から受け入れの可否の連絡が届いているかもしれない。

ワルシャワやブダペストなど、未だ訪れていない欧州各国の都市に足を運ぼうとしているのは、自己を超越した存在が、私が秋から本当に再び米国に戻ることを知っているからなのかもしれない。その他にも足を運びたい場所は数多く存在しているが、ショパン博物館とリスト博物館は、欧州生活の最後の贈り物になるかもしれないという予感がしている。山口県光市:2018/1/3(水)08:21

No.603: Unity of Writing and Music Composition

It is possible to play music by writing with a natural language because our language can formulate a rhythm, a melody, and even a harmony. Moreover, it can apply modulation and other various techniques of music composition. Finally, I encountered the awareness that writing is equal to music composition and vice versa. Both are inherently distinct, but at the same time, both are intrinsically one. You know it, you knew it, or you will know it.

I'll just continue to write, write, write, write, and write; compose, compose, compose, compose, and compose. Then, I'll write, write, write, write, write, and write; compose, compose, compose, compose, compose, compose, compose, and compose. Until when? Until the last moment of my life. Why? Because that is all I can do for this world. In the sky above Russia, 15:45, Saturday, 1/6/2018

1967. 松が教えてくれたこと

今日は先ほど散歩に出かけた。ただし、今日は砂浜を歩くのではなく、近くの文房具屋に立ち寄り、ボールペンのレフィルを購入した。その帰り道、国道を通るのではなく、家の近くの松林に立ち寄った。私はしばらくそこに佇みながら、立派な松をじっと眺めていた。

一本一本の松に番号が振られており、「松の戸籍」と書かれたプレートが取り付けられてあった。そのプレートを眺めながら、一本一本の松の年齢を考えていた。「この松がここまで育つのに、一体どれほどの年月がかかったのであろうか？」そのような問いが自然と生まれてくるような、立派な松に私は息を飲んだ。

松のてっぺんを仰ぎ見ると、その向こう側には青空が広がっていた。青空をゆっくりと動く白い雲。

松、青空、白い雲、それら三つが生み出す景観に私はしばらく見入っていた。近所のこの松林は有名なのだが、改めて松を一本一本じっくりと眺めてみると、その趣に気づかされる。

私が生まれる遥か前からここにあったであろう松たち。そして、これからも松はここにあり続けるだろう。

あることの尊さ。そこにただあるだけという現象の奥にある奥深さに気づくだろうか。

新春の風がそっと吹き抜ける。それにつられて松の小枝がさわさわと踊りだす。

松林が生み出す景観美に見とれ、しばらく我を忘れていると、ふと自己意識を取り戻した。松林から抜け出ようとした時に、ちょうどそこに若い松が何本か植えられているのを見つけた。「この松もいつかきっとあの松のように立派な姿になるのだろう」という思いが私の内側を通って行った。

今日の前に姿を見せている松は、あの松のような姿に変容するまでに気の遠くなるような歳月を必要とするのだろう。だが、それこそがまさに変容の本質である。私たちは、人間の一生よりも長大な時間をかけて成し遂げられるものがこの世界に存在していることを忘れてはならない。そして、そのようにして生み出された創造物を、私たちはぞんざいに扱ってはならない。人間に変容の本質を教えてくれるのは、自然であり、人間を超えたものなのだ。山口県光市:2018/1/3(水)16:33

No.604: Practice of Modulation

I'll practice modulation basically based on C major because the key is the most fundamental one. Referring to "Modulation (2007)" written by Max Reger, I'll experiment from C major to various keys. This practice will last until I'll be familiar with the technique of modulation. In the sky above Russia, 17:46, Saturday, 1/6/2018

1968. 作曲という創造的問題解決

昨日から再び、自分の曲を生み出す過程の中で作曲技術を高めていくことを行い始めた。この二、三週間は、テキストから集中的に作曲理論を学んでいたのであるが、やはり実践を通じた学びほど大きなものはない。

曲を作りながらふと思ったのは、作曲とは創造的な問題解決である、ということだった。曲を作るたびに新たな問題にぶつかり、それを試行錯誤の中で解決していく。おそらく、プロの作曲家であっても、新たな曲を作ろうとする際には、それが新しいものであるがゆえに、これまで直面したことのない局面に出会うことになるだろう。そこで直面する新たな問題を解決する際には、既存の知識と経験を総動員しながら問題解決に当たる必要がある。すなわち作曲とは、単に新たな曲を生み出していくがゆえに創造的なのではなく、そこで直面する問題を解決するプロセスそのものが創造的なのだ。

また、作曲家という人間自身が自己産出的な特徴を持っており、絶えず発達を遂げていく存在であるがゆえに、作曲家と作品の双方が発達を遂げていくというのうなづける。ゴッホの手紙にあるように、それら双方の発達の速度は同じではない。つまり、作曲家自身の発達と作品の発達が足並みを揃えて行われるとは限らないのである。ただし、それら双方は相互互惠的な関係を結んでいる。作曲家自身の内面的成熟は作品の発達に影響を与え、作品の発達は作曲家自身の内面的成熟に影響を与える。

今日は早朝から随分と冷え込んでいるが、朝日は相変わらず美しい。早朝の清らかな朝日を浴びながら、今日も自分の取り組むべきことに従事する。

今日は午前中に作曲実践を行い、午後からは、研究アドバイザーのミハエル・ツシオル教授に、最終版の研究計画書を送る。いよいよ今月末から本格的に新たな研究に着手する。今はその時がただただ待ち遠しい。研究計画書を最終確認し、それをツシオル教授に送ったら、昨日受け取ったメールに返信をしておきたい。特に、来年に所属予定の米国の大学院の教授から受け取ったメールに対して返信をしたい。自分の研究に対して最も好意的な反応を示してくれたその方にメールを送る。今年の秋からの研究に対する期待が自ずと高まる。

それらがすべて終わったら、再び作曲実践と読書を行いたい。昨日も改めて思ったが、読書が主であってはならず、書くことと作ることが主となるべきである。創作活動を何よりも主とし、それを補完するように読書を行っていく。とかく私は、読書ばかりを行ってしまう傾向にあるため、そうした習慣を少しずつ是正していく必要がある。読書は創作活動の養分としての役割を果たすため、今後も書を

読むことは続けていくが、それを主としない。活動の主軸は、徹頭徹尾、創作行為にある。山口県
光市:2018/1/4(木)07:47

No.605: Thirst of English

Because I took a distance from English for more than two weeks, I'm currently esurient of English books and articles. Once I arrive at my apartment in the Netherlands, I'll voraciously read English books and papers, particularly about philosophy of education and nonlinear dynamics.

I'm thirsty of philosophy and science. I remember that one of the Dewey's books is not read yet and is waiting for me. I really want to solidify the meaning of my life with the help of great philosophers. Anyway, I'll dive into the philosophical and scientific world again. In the sky above Russia, 18:46, Saturday, 1/6/2018

1969. 曲の階層的な時間スケール

作曲実践をしながらふと一つの当たり前のことに気づいた。それは、作曲をする際に、楽譜を全て音符で埋める必要はないということだ。つまり、休符を活用することの重要性にはたと気づかされたのである。文章の執筆に比べて、作曲が難しいのは、私はまだどこでどのように曲の区切りをつけていいのかを掴んでいないことである。

もちろん、基本的には八小節を前半と後半に分け、それを一つのまとまりとするようにしている。そうした点において、それは一つの区切りを意味する。しかし今後は、そのような意味的な区切りのみならず、曲の中にいかに休符を盛り込んでいくかを考えていく必要がある。音楽は、音の鳴らない世界から始まることを忘れてはならないし、音が鳴らない世界も音楽世界であることを忘れてはならない。

数日前にバルトークの音楽に触れる機会があった。その曲は、この世界の何かを打ち叩きながら進行するようなリズムを持っていた。太古の昔に、人類が物質を叩いて音を奏でたかのような原初的な音の響きがそこにあった。バルトークの曲の楽譜を見ていないのでなんとも言えないが、シンコペーションを活用したり、リズムの工夫をしたりすることによって、そうした原初的な響きを創出できるかも

しれない。こうした原初的な響きが興味深いのは、それは私たちをある種のトランス状態に導きうることである。その音楽が原初の響きに近ければ近いほど、私たちの脳が持つ古い部位がそうした響きに共鳴をするのかもしれない。トランス状態と脳の階層について考えていると、曲の階層性について考えている自分がいた。

様々な観点から、曲には種々の階層が存在している。そして、それら一つ一つの階層に、固有の時間スケールが対応しうるのではないかと思う。ある曲を聴きながら、時に時間が早く流れるように感じたり、遅く流れるように感じたりするのは、曲が持つ階層的な時間スケールによるものではないかと思う。曲が階層的な時間スケールを持ちうるというのは、未だ仮説の域を出ないが、その仮説の検証を踏まえ、意図的にそうした曲を作れるようにしたいと思う。

曲が持つ異なる時間スケールを活用することによって、異なる時間の階層を行き来するタイムトラベルを誘うような曲が実現するかもしれない。その実現に向けて、今日もこれから作曲実践に取り組む。山口県光市:2018/1/4(木)08:15

No.606: Multicolored Stroll

While taking a stroll, various thoughts and feelings emerge in my psyche. In that sense, a stroll would be intrinsically multicolored. Groningen, 11:16, Sunday, 1/7/2018

1970. 生活環境の変化について思うこと

昨日、米国のとある大学院の教授からメールの返信を受けた。今年の秋からその教授と共に協働研究を行うことができれば幸いだ。

あと半年ほどしたら、私はまた生活環境を変えるかもしれないということについて、いろいろ思うことがある。直近の10年間を振り返ってみたときに、なぜ私がこれほどまでに生活環境を変えていたのかということについて、少しばかり新たな考えが芽生えた。ある一定年数を経たのちに生活環境を変えるというのは、ダイナミックシステム理論の観点を用いると、随分うなづけることがわかった。これまでの数年間、ある特定の場所で生活を営むことによって、外部環境への適応を余儀なくされ、

その適応が既存の自己では不可能であることが判明するや否や、緩やかかつ突発的な変容を私は経験してきた。

変容後の自己は、環境からの要求に応えられるようになってくる。そして、この時期をしばらく過すと、完全な環境適応が起こり、自己システムはそれ以上の変容を経験しなくなる。どうもそのタイミングで、私は環境を変える決断をしているように思えてきたのである。

欧州での生活も一年半弱が過ぎ、昨年の変容体験を経て、欧州への適応は落ち着きを見せている。遍歴を通じた成熟を望む自分の魂が、再び生活環境を変えることを私に要求する。その呼びかけに応じるかのように、今年の秋からの米国での生活の現実味が増してきた。ただし今はまだ、半年後の生活についてあれこれと考える必要はないだろう。それよりもむしろ、今という瞬間から心の眼を逸らさないようにすることが大切だ。

数日前に、ベートーヴェンのピアノソナタ29番「ハンマークラヴィーア」は、「ピアノで書いた交響曲」と呼ばれていることを知った。この曲のスケールを考えると、そのように呼ばれていることも納得がいく。ベートーヴェンが示してくれたように、やはりピアノ曲でも交響曲と同じようなスケールの作品を作ることができるのだ。ピアノ曲だけを作ろうとする自分にとって、それは何か大きな可能性の提示であるように思われた。

以前、大学における正規の作曲教育のカリキュラムを眺めていると、オーケストレーションに関するコースが必ずあることに気づいた。自分は交響曲や協奏曲のような曲は作らないと決めていたのだが、オーケストレーションを学ぶことによって、ピアノ曲における作曲の幅が広がるのではないかと思いはじめている。ピアノ曲でスケールの大きい作品を作る場合に、オーケストレーションに関する知識は無いよりもあった方が望ましいのかもしれない。近い将来に、私はオーケストレーションに関する学習に乗り出しているような気がする。山口県光市:2018/1/4(木)09:48

No.607: Our Two Braves

What exists in our inner world is not only one brave. Two braves reside in us. Otherwise, we would be overwhelmed by the severity in this reality. Groningen, 11:44, Sunday, 1/7/2018

1971. これからの七ヶ月

今日はいよいよ実家に滞在する最後の日となった。明日からは、成田空港近くの日航ホテル成田に一泊ほとする。そして明後日にはオランダに向けて出発する。今回の一時帰国は、日本に二週間強ほど滞在することができ、精神をくつろがせ、同時に精神を強靱なものにする足がかりを得たような気がする。

日本への一時帰国は私にとって、ある意味、生活環境の小さくない変化であり、それは非日常意識へと私を誘う。今回の滞在期間中も継続的に非日常意識の状態が続いていた。

明後日からは、私にとっての日常であるオランダの生活が再び始まる。ここからおよそ七ヶ月ほどの期間は、欧州生活を締めくくるための重要な期間であり、充実した日々を送りたいと思う。ここからの七ヶ月の間に、私は自分の人生を大きく変える転機に恵まれ、重要な決断をするだろう。

今日は計画通りに、研究アドバイザーのミヒヤエル・ツシオル教授に研究計画書の最終ドラフトを送った。オランダに戻ってから二週間後には、研究テーマの紹介を兼ねたポスタープレゼンテーションを同僚や教授陣の前で行う。A1ぐらいの大きなポスターを用いてプレゼンテーションをしたことはこれまでなく、今回が初めての試みとなる。発表資料に関しては、すでにツシオル教授からテンプレートを送ってもらっているので、それを基にして明日か明後日の移動中に資料の大枠を完成させたい。

研究の準備が着々と整う中、作曲実践も再び旺盛に行い始めた。とにかく今は、作曲理論のテキストに掲載されている具体例をアレンジしながら実際に自分の曲に活用してみることや、様々な曲の楽譜を参考にし、それにアレンジを加えることによって曲を生み出すことに専念している。ここから少なくとも丸一年は、とにかく模倣を通じた創造に徹したい。模倣をする際にも、単にテキストの具体例を再現するのではなく、楽譜に書かれていることの意味を考えることなく鵜呑みにするのでもなく、とにかく自分の頭と感性を働かせながら、能動的な模倣に徹したい。

受動的な模倣をいくら繰り返していても、自分の作曲技術は全く高まっていけないだろう。とにかく、意味を見出していくのである。一つ一つの音符の配置、各小節間の関係性、調の種類など、意味を汲み取るべきことは無数にある。さらには、作曲者の思想までも汲み取ることを意識して模倣を行っ

ていくのである。仮に過去の偉大な作曲家の技術と思想を自己に取り込み、そこから自分独自の曲を創出できたならどれだけ喜ばしいだろうか。そのようなことに思いを馳せながら、今日もこれから夕食までの時間を作曲実践に充てたい。山口県光市:2018/1/4(木)16:32

No.608: To Regain the Rhythm

I got up at 4:30 today; my mind and body were full of vitality. From today, I have to gradually shift my mind from Japanese to English because I had been immersed into the Japanese world in the last two weeks.

I'll read Beethoven's letters and one of John Dewey's collected works. In the rest of the time today, I'll compose music. Reading and composing music would make me regain the proper rhythm in my daily life. Groningen, 06:38, Monday, 1/8/2018

1972. 実家滞在最終日の夢

実家での滞在最終日、今朝はいつもより遅く六時前に起床した。まだ朝日が昇っていない。

今回の一時帰国中は、本当に天気に恵まれた。東京と山口に滞在していたが、どちらの滞在地においても一度も雨に見舞われなかったように思う。明日からオランダに戻るが、オランダの天気はいかほどだろうか。こちらの最低気温があちらの最高気温ぐらいなのはわかっているが、雪などは積もっていないかもしれないだろうか。そんなことを考えながら、再び環境適応をすることに向けて少しばかり心身の準備をする。

昨夜は不思議な夢を見た。夢の中で私は、海と山が同時に眺められるような場所にいた。砂浜のようであるが、砂浜ではなく、山の中の平地であるかのような場所に私はいた。そこにはテトラポットのような、プラスチック製の大きなゴミ箱が何個も列をなしていた。そのゴミ箱に近づいてみると、なんとその中から人が飛び出してきた。実際には突然飛び出してきたのではなく、ゴミ箱の中で何かを終え、ゆっくりとした動きでゴミ箱から外へ出てきたのである。

出てきた人が去った後、私はそのゴミ箱に近づいて中を確認してみた。すると、そのゴミ箱の中は、外観からは想像もできないほどに大きなスペースを持っていた。

あるゴミ箱の中には座敷のようなものがあり、別のゴミ箱の中には教室のようなものがあつた。私は、座敷のあるゴミ箱の中に入った。すると、見覚えのある顔が見えた。そこには、小中学校時代の友人が何人もいたのである。

男女半々に合計で10名以上はその場にいたのではないだろうか。そこで彼らは何をしていたのかというと、どうやら様々なクイズをしているようだった。特に私が関心を引いたのは、ピアノを演奏しながら問いに回答していくクイズである。同学年に何人かピアノを弾ける女子がいて、そのうちの二名がクイズに挑戦していた。私は二人が問題に回答する様子を眺めながら、その演奏技術の高さに驚かされた。

二人のうちの一人が私に声をかけてきて、私も問題に挑戦することになった。だが、問題の内容を理解することは難しく、その回答を即興的に演奏することはさらに至難の技だった。しばらくクイズに興じた後、私はその場を離れ、ゴミ箱から外に出た。そこで私は、実家に早く戻る必要性を突然感じた。しかし、自宅に戻ろうとする意思を挫くかのように、突如として雨が降り始めた。

雨の強さは凄まじく、いつの間にか辺りは雨水の海となった。水深で言えば10mほどの雨水が突如として辺りを覆い尽くしたのである。私は雨水の大海を泳いで実家に戻ろうとした。しかし、そこから実家までの距離は数キロほどあり、泳げない距離ではなかったが、母に電話をして途中の駅に車で迎えに来てもらうことにした。

雨水の大海を泳ぎ、一山超えた地点が母との待ち合わせ場所であつた。母と合流するや否や、悲報を聞かされて私はショックを受けた。車中でその件について母と話をしていると、現実世界で母がコーヒーを入れる音によって目が覚めた。

今日はこれから新幹線の最寄駅である徳山駅に行き、そこから品川を経由して成田に行く。いつもと同じように、成田空港近くのホテル日航成田に宿泊する。そのホテルのロビーにある行きつけの小さなカフェで夕食を食べる姿を私は想像していた。人間の想像力は目を見張るものがあるが、同時にそれは今を生きることを難しくさせるものでもある。山口県光市:2018/1/5(金)07:04

Farewell is a restart and vice versa. If our life consists of continuous restarts, that means our life is a series of farewell. At the same time, if our life comprises continuous farewell, that implies our life is a process of continuous restarts. Our life seems to be constructed by ceaseless farewell and restarts. Groningen, 07:05, Monday, 1/8/2018

1973. 諦念とトンネル

今朝は少しばかり雨に見舞われた。日本に滞在中の二週間強の間に初めて降った雨は、滞在の最終日であった。どうやら日本を離れる明日の天気は良いらしい。今朝、私よりも早く父が外出をした時、玄関先で父に挨拶をした。その時、父とわずかの間目が合った。父にどのような意図があったのかはわからないが、私は父の目から何かを感じ取っていた。

しばらくして、私も実家を出発した。今はすでに雨が止んでいるのだが、出発する時は雨が降っていたため、母に最寄り駅まで車で送ってもらった。車の後部座席に置いた小さなトランクケースを取って母に別れを告げる時、今度は母と目が合った。そこでもまた、母の目から何かを感じ取っている自分がいた。

これまで毎年、年末年始には実家に帰っていたが、別れの際に両親の目から複雑な感情を感じ取ることがなかったように思う。それがいったいどのような感情なのかはわからない。しかし間違いなく、ある特別な感情がお互いの間に湧き上がっていることは明らかだった。

徳山駅から品川に向けて新幹線に乗り込んだ。新幹線の速度は年々早くなっているのか、東京から山口までの新幹線の乗車時間が以前よりも短くなっている気がする。今も気がつけば、広島を通り過ぎ、岡山に向かおうとしている。車内の窓からはのどかな景色が見える。しかし、そののどかさは、オランダのそれとは質を異にしている。目に映る家々も自然も、欧州で見るそれらとは印象が異なっている。

なぜそのようなことを今ここで書き留めているのだろうか。なぜなら、今この瞬間に目に映る景色そのものと、それによって喚起される感情や感覚が尊いからである。

ここ最近の私は常に、「諦念」という言葉に集約できるであろう感情を抱いている。オランダから日本に戻ってくるときもそうであったし、日本からオランダに戻る今の心境もまさにそうだ。それは肯定的でも否定的でもなく、色のない色を持つ諦念の感情である。そして、それは音のない音を持つ諦念の感情である。

山口から岡山を抜けるまでは、いくつものトンネルが続く。トンネルを取り抜けては次のトンネルに入り、それを抜けてはまた別のトンネルに入る。

人生。トンネルに入っている時は外に何も見えないのと同じように、人生のトンネルもそのように私たちの視界を遮断する。しかし、そうしたトンネルのさなかにあっても、私たちはかすかに見える何かを忘れてはならない。トンネルの中にも見えるものはあるのである。いや、トンネルの中にいるからこそ見えるものがある。それを見ないで何を見るというのか。

人生において、常に目には見えないものがありながらも、常に見えるものもあるのだ。その双方が存在していることを忘れてはならない。岡山近郊:2018/1/5(金)11:35

【追記】

当時の自分がどのようなことを思っていたのかは、今でも鮮明に覚えている。「トンネルの中にいるからこそ見えるものがある」という当時の自分の言葉に、どこか打たれるものがあった。私たちは、いかなる境遇に置かれても、必ず何かが見えるのである。むしろ、そうした境遇に置かれていることによってしか見えないものがある。それを見ること、そしてそこから汲み取られた意味を頼りに再び歩を進めていくことが、人間として生きることなのかもしれない。

No.610: Beethoven's Letters (1972)

I skimmed "Beethoven's Letters (1972)" today. Even though I didn't delve into the details of Beethoven's letters, some passages stimulated my mind. Especially, his letters with musical notes were quite intriguing. I'll read this book again in my near future. Groningen, 10:30, Monday, 1/8/2018

1974. 日本各地を巡る旅

気がつけば、新幹線は静岡までやってきた。新幹線に乗り、昼食までの間に、日本企業との協働プロジェクトの仕事を進めていた。ちょうど来週の火曜日に、協働者の方々を交えた、発達理論の勉強会を行う。それに向けての資料を作っていた。

当初の予定よりも速やかに資料の作成を終えた。そこから簡単に昼食を済ませ、作曲実践に取り掛かろうと思った。新幹線に備え付けのテーブルは、パソコンを置くには十分だが、パソコンと合わせてノートを置くスペースがなく、さらには揺れもあるため、作曲実践は宿泊先のホテルに到着してからにしようと思った。

作曲実践をホテルで行うことを楽しみにし、その代わりとして過去の日記の編集を行っていた。オランダでの日々において、日記は溜まる一方であるため、このように時間的なゆとりのある時に過去の日記を編集することが懸命に思われた。今から合計で10本ほどの日記記事を読み返す。

新幹線の窓から見える景色を眺めていると、いつか日本の各県を一・二年かけてゆつくりと巡りたいという思いが湧いてきた。まだ足を運んだことのない場所が日本各地に随分と多く存在している。

日本に存在している多種多様な風光明媚な場所を、いつかゆつくりと時間をかけて巡りたいと思う。季節に合わせて各地を移動し、必要な場所に必要の日数だけ宿泊して日本を巡る旅。そんな旅をいつかしてみたい。

この世界には、まだまだ素晴らしい場所が沢山ある。その場所でしか喚起されない感情や感覚を文章と曲にしていく旅。

場所や人との出会いは一期一会であり、それと同様に、場所や人との出会いによって生まれる感情や感覚も一期一会であることを見逃してはならない。そんな一期一会の無形の経験を、私はただ文章と曲として形にしていきたい。

そんなことをふと思った。静岡:2018/1/5(金)14:29

No.611: Auditory Hallucination

I was still having a jet lag today that caused a kind of altered states of consciousness. It amplified my senses, in particular my auditory sense. The amplified auditory sense engendered an auditory hallucination.

Although the state of my mind and body seemed to be fine in the morning, the condition changed in the evening. I have to go to bed early today, too, in order to fully recover from a jet lag.

Groningen, 18:38, Monday, 1/8/2018

1975. 予期せぬ最後の瞬間

ホテル日航成田に到着し、今は自室でこの日記を書いている。部屋の窓から外の景色を眺めると、運命的かもしれないが、昨年泊まった部屋とほぼ同じ場所のような気がする。このようなこともやはり起こり得るものなのだ、と改めて人生の運命的な不思議さについて思う。

品川から成田空港のターミナルまで「成田エクスプレス」を活用し、その乗車中に、再来週に行われるポスタープレゼンテーションのPPT資料を作成することができた。一人当たり15分以内の時間を用いて、自分の研究について紹介するプレゼンテーションが再来週に控えている。これまで一度もポスタープレゼンテーションをしたことがなかったので、その資料作りにどれほどの時間がかかるか読めなかったが、PPTスライド一枚に研究内容をまとめることはそれほど難しいことではなかった。

品川から成田空港までの一時間を活用し、無事に資料のドラフトを作成することができた。数日前に研究アドバイザーのミハエル・ツショル教授に送った研究計画書のフィードバックが返ってきたら、こちらのプレゼン資料に手直しを加えたい。

新幹線に乗っている最中にも感じていたが、とりわけ品川から成田空港に向かう列車の中で、日本の過密な人口密度について考えていた。窓の外から景色を眺めると、居住用の家や商業用のビルが所狭しと密集している。空間的にゆとりのない景観を眺めながら、こうした過密な人工密度が日本人の身体と精神に少なからぬ影響を与えていることを知る。

空間と時間が密接な関係を持っているのであれば、空間的なゆとりと時間的なゆとりとは関係し合っているのではないだろうか。おおらかな心は、ゆとりのある空間スペースを基盤にして生まれるような気がしてならない。空間的な広がりと時間的な広がりには相関関係があり、それらは心の広がりとも関係してくるのではないだろうか。時空間的に異なる様々な場所で生活してみると、その仮説にはどうも妥当性がありそうだと思う。

成田空港が近づいてくると、私は、人間にとって最後の瞬間がいつやってくるかわからないという事実と向き合っていた。私たちは、本当に最後の瞬間がいつやってくるのかわからないのである。それは私たちの人生を含め、動植物の命もそうであるし、その他の出来事に関しても当てはまる。最後の瞬間は、予期せぬ形で突如としてやってくる。

どんな手段を用いようが、完全には予期できない無数の事柄がこの世界には存在しているのだ。そんな当たり前の事実を改めて考えてみると、人生の諸々の事柄に対して神妙な気持ちになる。それは恐れというよりも、畏怖の念に近いかもしれない。この瞬間にも、私たちには予期できないことがこの世界の至る所で起きている。

そのようなことを考えていると、成田空港に到着した。このような思念が浮かび上がったことも、私には予期できないことだった。成田：2018/1/5(金)17:53

No.612: Study of Fugue

I tried to apply the technique of fugue today. The application of fugue was quite challenging to me because of my present knowledge and skills.

Since I hadn't received an ordered book about fugue yet, only what I could do was to refer to Bach's music scores. I was able to grasp a tiny part of the theories of fugue. Examining works based on fugue would be the first step to learn it. Groningen, 18:43, Monday, 1/8/2018

1976. 出発の朝に

日本を離れる日の朝がやってきた。宿泊先のホテルが快適であったためか、今朝も普段と同じように体調がいい。成田での日が昇る時刻は、山口県のそれよりも早く、六時半を迎える今はすでに外

が薄明るくなっている。ホテルの自室から、朝日に照らされ始めた空が、様々な色調を持った姿を見せている。

自室から飛行機の滑走路がすぐ近くに見えるのだが、ホテルの防音がしっかりしているためか、一切の騒音が聞こえない。着陸で待機している何台かの飛行機が星のように光って見える。

今朝方、印象に残る夢を見た。夢の中で私は、小中学校時代のある一人の友人が持っている、芸術に対する特異な感性について、その友人から相談を受けていた。話を聞いてみると、彼の感性と私の感性は似ており、何らかの芸術作品に対する対象理解の方法が似通っていた。もう少し話を聞いてみると、それは芸術作品のみならず、自然界の現象全般に関しても感性が共通していることがわかった。

彼と私が共通に持っている感性を「特異」という言葉で表現したが、実際のところは、お互いにそれが「異常」なものであることを理解していた。二人で話をしていたところ、中学校時代にお世話になっていた数学の先生がその場に現れた。先生は、私たちが何について話していたのかに関心があるようであり、私たちの話に割って入ってきた。友人と私は少し話を濁らせた。だが、その先生は本当に私たちの話に関心があるらしく、根掘り葉掘り様々なことを聞きだそうとしていた。

友人の話を聞いている私は、さながらサイコセラピストのようであり、先生は私がそのように振舞っていることについて少し心配をしているようだった。すると先生は、私が友人の相談に乗ることと、サイコセラピストやカウンセラーを含め、その道の専門家が友人の話を聞くことのどちらが最も望ましいのかについて質問を私に投げかけてきた。両者のメリットとデメリットをそれぞれ述べるように先生は私に要求してきたのである。私は即座にその質問に答えた。

彼が私に相談することと、サイコセラピストやカウンセラーに相談することのメリットとデメリットをすぐさまいくつかに列挙した。すると先生は私の回答に納得したようであり、結局、私が継続的に友人の相談に乗ることになった。友人と私はお互いに理解し合える関係性を持っており、また二人の感性は特異なものであるため、他の人に相談を持ちかけずに済んだことに対して、二人は安堵した。そこで夢から覚めた。

時刻は七時に近づきつつある。八時あたりにホテルを出発し、空港のラウンジで少しばかり仕事をしたい。ラウンジで仕事を終えることができたなら、まだ書き残せていない日記をいくつか書き、それが済んだら作曲実践を行いたいと思う。昨夜の就寝前にホテルの自室で作っていた曲を完成させたい。

今、ホテルの自室から見える成田の空は雲ひとつなく、とても爽快だ。良い天気にも恵まれた幸運に包まれながら、今日も自分がなすべきことに淡々と取り組んでいく。成田:2018/1/6(土)06:46

1977. 成田空港のラウンジで

今、成田空港のラウンジでこの日記を書いている。先ほどラウンジで簡単に朝食を済ませ、いくつかの仕事をこなした。

ここ数ヶ月、いやこの一・二年継続している瞑想的な覚醒意識の中で、いついかなる時も自分の内側に自分が静かに佇んでいるのがわかる。そういう状態の中では、思考を司る仕事にすぐさま入っていける。

先ほどもラウンジでコーヒーを入れている最中に、瞑想的な自己が強く前面に現れた。絶えず瞑想的な意識状態にありながらも、そこからさらにその瞬間の自己に意識を向けると、意識の状態が一気に深まる。まさに四六時中、何をしている時でも座禅をしているかのような感覚なのだ。

ラウンジでくつろぎながら、いくつかの仕事を集中的にこなすことができたため、ここからは何か思考や感覚が刺激されるたびに文章を書き、その他の時間は全て作曲実践を行いたい。

幸運にも、成田からヘルシンキまで到着するには10時間以上あり、出発時間も昼前であるため、機内では一睡もすることなく作曲や文章執筆に集中することができるだろう。ただし、オランダから日本に向かう機内では一睡もすることなく、それが疲れを引き起こしたことを忘れてはならない。だが、そもそもそれは、向こうの時間の夕方に飛行機に乗ったからであって、今回はこちらの時間の昼であるから、逆に機内で睡眠を取る必要はないだろう。ただし、食後しばらくしてからは、いつもと同じように20分ほどの仮眠を取りたい。

10時間ほど経てばヘルシンキに到着し、そこから乗り継ぎをしてアムステルダムまで行く。空港ではフィンランド航空のラウンジに行き、そこでシャワーを浴びて少しばかりゆっくりとする。

ヘルシンキからアムステルダムまでの機内では、引き続き作曲や文章の執筆に時間を充てる。そうすれば、二時間ほどのフライトはあっという間だろう。

アムステルダムに到着するのは午後の六時過ぎであり、そこからフローニンゲンまで列車で二時間半ほどかかる。おそらく、その時間帯になればもはや書籍を読むような集中力は残っていないだろうから、作曲実践など、手を動かし、自分を没頭させてくれるようなことに従事したい。

ヘルシンキ行きのフライトの搭乗時刻が刻一刻と近づいている。あと30分ほどしたら搭乗のアナウンスがあるだろう。想像していたように、日本を出発し、欧州に戻る前の感情は、以前のものと随分と異なっている。やはり、諦念の感情が自分の内面世界を満たしているからだろうか。

日本を離れることも、日本に行くことも、世界のどこに行くにも、もはや私はそれをありのままに受け入れるようになっている。まさにそれは諦念の境地の一端を垣間見せるものである。成田:2018/1/6(土)10:37

1978. 出発の決意

そろそろ、ヘルシンキ行きのフライトの搭乗が始まる。今、私は空港のラウンジで、駆け込むように日本語の日記を書き留めている。もちろん、オランダにおいても日本語の日記を絶えず書き残していくだろうが、今この瞬間のように、日本語が思考空間で常に優位を占めることは今後はほとんどないであろうから、このような機会に日本語を用いて何かをできるだけ形にしたいという思いが芽生えているのかもしれない。

この二週間強ほどの日本滞在によって、一旦英語空間から離れ、日本語空間に浸りきった。ここからオランダに戻り、再び英語空間の世界に入った時に、自分の思考も感性も、少なからず変容を遂げているように思われる。なぜなら、ある言語空間への集中的な没入の後、別の言語空間に移行すると、元々の言語空間が熟成され、新たな思考や感性が育まれるからである。これまでのオラン

ダでの生活で優位であった、英語空間にこれから戻った際に、どのような思考や感性が育まれているのだろうか。

昨日は、ホテルの自室でハイドンのピアノソナタばかりを聴いていた。改めてハイドンの曲を注意深く聴いてみると、やはりハイドンは偉大な作曲家であると実感した。私はまだハイドンのピアノソナタの楽譜を持っておらず、ハイドンの曲を精緻に分析したことはないのだが、近々ハイドンの思想と作曲技術に範を求める日が来るだろう。

一昨日と昨日にかけて、実は一つのことについて考えていた。今後の年末年始は、日本に戻るのではなく、どこか別の国で過ごそうという考えだった。その理由については、ここで詳しく書くことをしない。一つの理由ではなく、いくつかの理由が絡み合い、それがそのような決断を私にさせた。もちろんそれは、今後一切日本に帰らないということを意味しない。ただ、毎年日本に帰ることの意味が徐々に薄れ、今回の日本滞在を通じて、毎年日本に帰ることの意味よりも、別の国で年末年始を過ごすことの方がより重要な意味を持つことにはたと気づいたのである。

今後の年末年始は、まだ訪れたことのない暖かい国に足を運んだり、あるいは逆に、冬の時期にその姿を見てみたい場所などに訪れる。前者に関してはこれといった候補先が浮かばないが、後者に関してはギリシャやエジプトなどを候補地として考えている。あるいは、冬の北欧やアイスランドにも訪れてみたいという気持ちが静かに湧いてくる。とりあえず、今後は毎年日本に帰ることをせず、その代わりに他国を訪れ、人気の少ない場所で黙想的に年末年始を過ごそうと思う。

ここ十数年、年末年始は基本的に実家に帰っていたため、そうした決断が生まれたことを不思議に思う。しかしそれは必然的な事柄であり、その決断を持ってして、ようやく新たな出発を行えるように思うのだ。

出発に次ぐ出発の人生。今回の出発は、何かとても大きな意味を持つものであるように思える。

ヘルシンキ行きのフライトの搭乗時間まで残り15分ほどとなった。次に日本の大地に足を踏み入れるのは数年後のことになるかもしれない。それを踏まえて、搭乗口への一步一步を大切にしたいと思う。それは、日々の一步一步の歩みを大切にすると何ら変わりはないのである。成田:2018/1/6(土)10:58

No.613: The Importance of Taking Care of Body

As well as the day before yesterday, I had sudden drowsiness last night. Because it was invincible, I went to bed early before 9 o'clock. Because of the sufficient sleep, I think my physical and mental condition are fully recovered today.

I realize how important to take care of our body is. Our body is the most fundamental component of our existence. Without a well-conditioned body, we could not fully engage in daily activities.

Sleep, food, and exercise are crucial for nurturing our body. Although the importance of these aspects is often emphasized, I suppose that most modern people neglect one or two of them. Once the three factors are integrated into our daily life, we can maintain our body in an optimal condition. Groningen, 06:24, Tuesday, 1/9/2018

1979. ロシア上空での決意の確認

成田空港を出発し、ヘルシンキに向けて飛行機が出発した。昼食の機内食を摂り終え、作曲実践に入る前にいくつか書き留めておくべきものを書き留めておこうと思う。

成田からヘルシンキまでのフライト時間は10時間ほどなのだが、昼食を食べ終えた頃にはすでに残り七時間ほどとなっていた。これから残りの時間は文章を書き、作曲をすることに充てようと思う。

欧州に近づくにつれて、曲中の転調と同じように、徐々に心身の調を変えていく必要がある。つまり、これから徐々に日本語空間から英語空間に身心共に調節をしていく必要がある。存在を英語空間に調節するためには、英文日記を書くことが有益だろう。英文日記を書きながら、徐々に思考を元の英語に戻していく。

飛行機に乗ってからの三時間ほどは、存在の奥底に沈み、地面から跳ね上がるような感情があった。存在の基底に触れるというよりも、存在の基底に打ち付けられ、そこから激しく生を燃焼させようとする気持ちが起こるという現象に見舞われた。

私はどこか、今回を機にしばらく日本には戻らないことを知っていたかのようにであった。そのことについては誰にも言っていない。なぜなら、私自身もそのような決断に踏み切るとは思ってもいなかったからだ。だが、よくよく考えてみると、生活拠点を今後長く国外に置くことを以前に決心していたことは、今回の決断の伏線になっていたような気がするのだ。

日本のそばで日本に関与したいという思いが激しく、激しく、激しく、激しくなるほど、日本に物理的に近づいては決してならないという思いが、強く、強く、強く、強く起こる。

物理的に日本に触れるという甘えを捨てなければならない。いや、それを捨てるだけではもはや足りないのだ。日本に物理的に接触しようという甘えを内側の世界の中で焼き尽くす必要がある。私はそれほどまでに、精神的に日本に近づきたいのだと思う。

精神的に母国に触れ、日本と自己の存在が一つになることを本当に心から望んでいるのだと思う。そのためには、やはり今回をもってして、しばらく日本を訪れないようにする必要がある。よほどの事情がない限り、母国の大地に足を踏み入れてはならない。今の自分はまだ日本に帰っていいようなところにいなかったのだ。今回の一時帰国をもって、それを強く実感することになった。

活動する涅槃として生きること、この世界に関与し続ける涅槃として生きること。今日この瞬間からそのように生きたい。

人はいつからでも出発できる。それをある人は「やり直し」と表現するかもしれない。だが、私はそれを「出発」と呼ぶ。今日から、この瞬間からまた新しい出発をしたい。

人間は誰もそれができる。いついかなる時でも、人は新たに出発できるのだ。

日本にしばらく戻らないという決断もまた、新しい出発の誓いなのだ。ロシア上空:2018/1/6(土)
15:06

No.614: Practice of Fugue

I'll practice the technique of fugue based on Bach's music scores. Although I applied the technique yesterday, I still have several questions about fugue. Since I haven't received a text of

fugue yet, I have to extract some patterns and laws from actual music scores that utilize the technique of fugue.

The aim of today's practice is grasping how to create the last part of fugue. Because I understood a part of the principle about how to connect various melody lines in a fugue, I'll focus on how to end music. Groningen, 06:29, Tuesday, 1/9/2018

1980. 充実感という一筆を

計画通り、ヘルシンキに向けた機内では日記の執筆と作曲だけに従事することができている。もし何か一つ望みを叶えてくれる不思議な力がこの世に存在するなら、文章と曲を創出することによって自己を爆発させて欲しい。

書いても書いても、作っても作っても、自己が爆発することはない。それを乗り越えて、自己が炸裂して欲しい。

今の小さな自己に付着している諸々の構成物を全部一掃するような爆発が欲しい。なぜそれが起こらないのだろうか。

いつそれは起こるのだろうか。それが起こることだけを望む。

昼食の機内食を食べてからは作曲実践に随分と時間を充てていた。その曲が少しばかり陰の曲であるためか、その曲を作っていると自分の内側が陰の世界になっていた。その世界から飛び出すかのように、陽の世界に飢えている自分が顔をのぞかせた。

陰の感情が支配するときは、その陰を完全なまでに曲の形にしたい。しかし、今の私にはまだそれを実現する力量がない。中途半端に陰の世界に足を踏み入れ、自分の内側の陰のエネルギーを完全に形にするのではなく、途中で陰から陽に転じてしまう自分がいる。

仮に今後、陰陽を曲として完全に表現しきれぬ力量が得られれば、私はその時の内面世界の色に応じて自由自在に陰陽の対極世界を行き来することができるだろう。それは理想だ。

オーロラに見える場所で、静寂さが包む夜の砂漠で、生活の香りがするその土地の何気ないカフェで、堆積された歴史を感じさせる遺跡で、学術的な雰囲気漂浮をさせる大学の図書館で、この世界の様々な場所で、私は日記を執筆し、曲を作りたい。

それらはいつでもどこでもできる。自分が日記を書くのではなく、自分が曲を作るのでは決していない。

日記が自分を書き、曲が自分を作るのだ。そうでなければならない。

前者は決して自己の表現行為ではない。後者こそが、自己の存在に根ざした表現行為だ。

自分の内側の小さな自我が叫んでいる。書きたい、作りたいとしか叫べない小さな自我。だが、小さな自我はそれを叫べる。この自我の叫びに対して、私はどうしたらいいのだろうか。

小さな自我に自分を委ねてみるのはどうだろうか。大きな自己が小さな自我をたしなめるのではなく、小さな自我の要求に応じ、小さな自我の叫びを大きな自己に貫通させるのはどうだろうか。そんなことをロシア上空で考えている。

数時間前もロシア上空だったが、今もまだロシア上空だ。ロシアは大きい。私は、ロシアにはまだ足を運んだことがない。いつかロシアの大地をこの足で歩く日が来るだろうか。

よくよく考えると、日々は旅なのではないかと思う。内面世界は無限に広く、無限に深い。日々、同じ内面世界を歩くことなどできない。私たちは常に、広大無辺な内面宇宙を旅しているのだ。そうした内面宇宙と密接に結びついているのが、この外面世界である。

この世界の様々な場所に旅をし、旅先で日記を書き留め、その土地固有の感情と感覚に喚起される形で曲を作る。今年の年末は、日本ではなくどこか別の国でそれを行う。自分のなすべき使命にこれからさらに激しく邁進したい。

普遍に至る道の過程で個に引きずり戻そうとする一切の現象を退けていく。とにかく今日から、この瞬間から、また自分の人生の充実感が濃さを増していくことを祈りながら、この瞬間の充実感という一筆を自分の人生に塗り重ねたい。ロシア上空:2018/1/6(土) 19:14

No.615: Significance of Music Analysis

If music can fully embody thoughts, emotions, and sensations, music analysis would be quite beneficial for understanding human nature in a deep way. Also, if music can foster our development, music analysis would be key to how to compose such music. Finally, if music can unlock human potential, music analysis provides us with insights about how to attain it through music. Groningen, 09:08, Tuesday, 1/9/2018